

スーダンの「国のかたち」

辻 岡 政 男

はじめに

私は、1990年4月から2年間、国際協力事業団スーダン事務所に勤務した。その間、国際協力に携わる数多くの技術協力専門家・調査団員・青年海外協力隊員を迎え、スーダン国の発展や開発について議論する機会があった。その際、しばしば出た議論は、「スーダンの人、一人一人は、非常に真面目で優秀な人が多い。しかし、残念ながら組織のまとまりが無いので、社会全体として発展しない」というものであった。ちょうどその頃、司馬遼太郎先生の近著、『この国のかたち』（文藝春秋社）を読んで、大変良いヒントを得た気がした。そうして、スーダンの国の発展についても、「国のかたち」をまず整理しておく必要があると思いついて、まず、とりあえず、私の手元にある材料をまとめて書いたのがこの小稿である。私は、とくに、スーダンのような多民族国家における「国民意識」の形成過程に関心を抱いている。

国の概要

スーダンは、アフリカ大陸のサハラ砂漠の東端に位置する国である。その面積は日本の約7倍の2百万平方キロメートルあり、アフリカ諸国の中で最も広大な国である。緯度で見ると、スーダンはフィリピンとほとんど同じ位置にあり、首都ハルツームは、フィリピンのマニラと同じ緯度にある。スーダンの国土の南部地域は、年間約一千ミリの降雨量があるが、その他の地域は非常に乾燥した土地である。国土の東側寄りをナイル川が南から北へ流れている。そのナイル川の兩岸の狭い範囲の土地で農業が営まれているので、空から見ると、茶色一色の乾燥した大地の中を南北に走るナイル川辺の緑の帯が、印象的な風景を形造って

いる。気候は、3月から11月の乾期は、日中の最高気温が摂氏45～50度に達し、非常に暑い。したがって、土地の役所などでは、仕事は朝7時半から始め午後2時頃に終わり、その後は、人々はふつう家の中で体を休めている。一方、12月から2月の雨期は、相当涼しくなって、最高気温は35度で、最低気温は7～8度に下がる。この時期は、朝晩の外出には、ジャンパーを着ないと大変寒い。夜は、毛布を2～3枚重ねてかけて眠るほど冷え込む。

総人口は約2千5百万人、そして首都ハルツームには約4百万人が住んでいると言われる。その内の百万人は、砂漠化の進む西部地域をのがれて生活の糧を求めて首都に集まってきた人々と、内乱の続く南部地域からの避難民からなる。こうした難民の多くは、ぼろ布とダンボール箱で囲った粗末な家で、首都ハルツームの周囲をグルリと取り囲むようにして住んでいる。

スーダンの国土の大部分は砂漠性の乾燥気候とはいえ、水資源として巨大なナイル川があり、南部地域には石油資源が確認されており、これらを国の経済開発に利用すれば、スーダンはめざましい経済発展を遂げると以前から言われている。しかしながら、現実には、スーダンは近年、経済不振が続く、数度にわたって為替レートの切り下げを余儀なくされ、現在、一人当たり国民所得は、私の計算では年100ドル近くまで落ち込んでいる。そして、世界の中の最貧国のひとつとして停滞している。その停滞の最大の原因は、1956年の国の独立以来続いている国内の政治的不安定につきるだろう。スーダンでは、独立以来、軍事政権と民主政権が交互に繰り返され、現在は、1989年7月に樹立された軍事政権下にある。独立以来の政治

的不安定の原因は、南部地域において反政府活動が続いていることだ。とくに、1983年、政府がイスラム法・シャリアを国内全土に適用することに決定して以来、キリスト教徒の多い南部地域の人々の間に反政府感情が高まり、この南部地域の内乱が深刻化した。現在は、その内乱はゲリラ戦争化して、收拾のメドが立たないようだ。そして、この内乱收拾を目的として、国家財政の三分の一近くが軍事費に費やされているが、この現状が続く限り、国の経済発展は大変困難だろう。

現軍事政権は、今年（1992）1月、南部の紛争を解決し、国の政治的安定を図る事を第一の目的として、暫定国民会議を設立し、近い将来、民政に移管する構想であると発表した。現在、スーダンの人々は、その暫定国民会議でどのような議論が積み重ねられて行くのか見守っている。

国のかたち

「国」の概念が、日本とスーダンとは異なっているのではないだろうか。スーダンの「国のかたち」について、その国境の成り立ちの観点から考えたい。

現在のスーダンの国土は、スーダンの人々の「我々は同じ国民」と言う、いわゆる「国民意識」を基礎にして、その国境が決まったものではない。1820年から、オスマン・トルコ帝国の配下にあったエジプト国王のモハメッド・アリが、スーダンの黒人奴隷と金の獲得をめざして軍隊を進め、現在のスーダンの全国土にあたる地域を支配下に置いた。それ以前は、スーダン国内には、多くの部族がそれぞれ独立の生活領域を有し、固有の文化を育てて生活をしてきた。いくつかの部族は、王国として栄えた。スーダン北部は、紀元前10世紀から紀元後4世紀まで、クシュ王国やメロエ王国が相次いで栄えた。このスーダン北部地域は、当時の大国であったエジプトやローマとアラビア半島諸国を結ぶ貿易の中継地として栄え、更にメロエ王国は鉄器生産を行って大いに繁栄した。現在もエジプトやローマ文化の影響を受けたこれら古代王国の王宮、神殿、ピラミッド等の大

規模な遺跡が風化しつつも残っている。中南部には、16世紀から19世紀初頭のエジプト軍の侵入まで、フンジ王国が栄えた。この王国の時代は、エジプト・サウディアラビア・モロッコ等の国のイスラム教学者の交流が盛んで、スーダンにイスラム教が根づいた時代と言われる。又、西部には、フンジ王国と同時代に、ダルフル王国が栄えていた。しかしながら、これらの王国の実効的な支配の及んだ範囲は、現在のスーダンの国土の一部に止まっていた。

そして、現在のスーダンの国境内の全域に及ぶ、いわゆる広域的支配は、前述した19世紀初頭のオスマン・トルコ帝国配下のエジプト国王のモハメッド・アリのスーダン侵入から始まる。その後、1884年、トルコの支配からスーダンを開放する民族運動が、スーダン北部地方の町ドンゴラ出身のマハディーによって興された。その後の15年間で、マハディー及びその後継者のカリファによって、はじめてスーダン人による現在の国土全域の統治が為された。しかしながら、その後、再び、スーダンは、イギリス・エジプトの共同統治の植民地となり、その状態が、1956年の独立まで続く。

こうしたスーダンの歴史を見ると、その特徴として、スーダンの人々は、国の独立に至るまでの間に、自らの手で、その全国土を統治した経験をわずか15年しか持っていない。この視点に立つと、独立後、続いている南部地域の紛争は、スーダンの国土がスーダンの人々の「内発的な国民意識」に基づいて設定されたものではなく、植民地支配者である外国人の手によって敷かれた歴史に起因すると言える。いわゆる「国境と民族のズレ」の問題である。そして、現在のスーダンは、外国人によって設定された国境の中で、「我々、スーダン人」という新しい国民意識を形成しつつ、国家形成を進めている過程にある。この点が、国土が海に囲まれて明確な上に、歴史の時間の流れの中で、徐々に国民意識を育てることができた日本の場合と大きく異なっている。

ハルツーム大学における研究

最近、スーダンの代表的大学であるハルツーム大学のアフリカ・アジア研究所で進められている研究テーマには、「多民族と国家統合」、「植民地からの独立運動」、「国民意識の形成」等、国の構造を扱うものが非常に多い。これは、この国の人々自身が、いかに自分たちの「国のかたち」の概念を整理するのに苦心しているかを表すものであろう。こうした研究に携わる人々の基本的な考え方の背景には、かつてスーダンの歴史のほとんどが、植民地時代にヨーロッパ人によって、スーダンを統治する側の目から書かれてきたものを、「自分たちスーダン人の手で正しく書き直したい」という熱い使命感があるようだ。特に、最初のスーダン人自身によって全国土の統治がなされた1884年からの15年間の、いわゆる「マハディーとカリファ」の時代の見直しに熱心だ。

アラン・ムーアヘッド著の『白ナイル』および『青ナイル』（篠田一士訳、筑摩書房）は、スーダンの歴史・社会・人々について、詳細な調査に基づいて、読みやすく書かれた名著だと思う。しかし、その書（『白ナイル』）の中で、著者は、スーダンの人々にとって独立の父であるマハディーの時代について、「専制体制かつ暴政が行なわれ、

残虐行為が愛国主義の名によってではなく、神の名を借りて行なわれた。」（201頁）と厳しく批判する。又、カリファの時代について、「統治期間に、初めての9百万人の人口の内、約75%が死滅したとされている。うち続く戦争と奴隷貿易は、毎年、数千人を消失させ、天然痘や梅毒は風土病となっていった。そして、1889年には、全国が飢饉に見舞われた。」（307頁）と、いかにも統治者が無策であったように書いている。しかし、一方、スーダン人の研究者によれば、マハディーとカリファは、スーダンの歴史上、初めて国を統一した英雄として位置付けられている。その時代は、国内的には、初めてスーダン独自の貨幣（スーダン・リアル）が制定され、大飢饉を乗り越え、対外的には、エジプト・アビシニア・リビアとの友好関係を開くなどの事業が為された時代と言われる。このスーダン人自身の手による「自国の歴史の見直し」研究の結果は大いに注目する必要がある。こうした対立した歴史の見方が存在することは、わが国の場合、スーダンのみならず、アラブ・アフリカの情報がヨーロッパ経由で入ってくるのが圧倒的に多いので、十分注意しておく必要があると思う。

〔つじおか まさお 国際協力事業団〕



首都ハルツーム市内の2月（冬期）の風景。まっ青な空にむかって立つイスラム寺院（モスク）の尖塔は、この国の代表的な風景である。